

『武装親衛隊とジェノサイド——暴力装置の
メタモルフォーゼ』 [芝健介 著] (有志舎, 2008年)

小野寺拓也

ナチズム・ホロコースト研究は1990年代以降、大きな進化・変容を遂げつつある。その変化は多岐にわたるが、本書との関連で言えば以下の三点が重要だと思われる。すなわち、①ホロコースト・総力戦体制、戦時期への研究関心のシフト、②マクロからミクロへ、「中央」から「現場」へ、③イデオロギーの「復権」、といった点である。まず、①ホロコーストや絶滅戦争、総力戦体制こそナチ体制の本質的な特徴が顕在化したものであり、戦時期をナチズム研究の中心に据えるべきだというコンセンサスが形成されつつある。「なぜナチ体制は成立したのか」から、「なぜホロコーストは可能になったのか」へと問いの重点が変化し、1939年までのドイツの国内体制よりも、1939年以降の前線・占領地における暴力、国内における動員体制や「銃後」のあり方などへと関心が移行しつつある。そうした中で、②ベルリン中枢で意志決定がなされ、末端は命令の受け手としてそれを実行するのみという一方向的な見方では不十分であり、ホロコーストや絶滅戦争において「現場」が果たした役割をミクロに見ていくことによって、「累積的急進化」のエネルギーは一体どこから生まれているのかを「下から」実証的に明らかにしようとする研究が、(その萌芽は1970年代後半の機能派の議論に既に見られるにせよ) 1990年代以降急増した。この背景には、ナチ体制は単に暴力的強制やプロパガンダを通じた「洗脳」・誘惑によって保たれていたのではなく、社会や「ふつうの人々」の同意・協力が支配には不可欠であったという、近年のナチズム像の転回がある。そして、人々がなぜ協力したのかという動機の問題を考える上で③イデオロギーが持つ意味を再び重視しようというのが、近年の潮流である。すなわち、反ユダヤ主義や人種主義といったイデオロギーを「非合理的」なもの、物質的利害を隠蔽するための口実などと決めつけることなく、人間の意識・行動を規定しうる重要な要因として捉えようとする流れである。

著者の前著『武装 SS ——ナチスもうひとつの暴力装置』(講談社, 1995年)は、戦時期の実証研究があまり存在しなかった当時であって、独ソ戦における武装 SS、人員かき集めにおける国防軍との競合関係や「人狩り」的動員、ナチズムの人種原理と矛盾するような東方諸民族部隊の創設など、第二次大戦下の複雑な諸相を明らかにした先駆的な研究であった(永岑三千輝氏による書評、『歴史学研究』687号, 1996

年)。十余年を経て、いわば後篇として書かれた本書はそれに対し、上記の②③における認識の深化が見られる。

まず目次を一瞥して真っ先に気づくのが、第2章「反ユダヤ主義世界観とその実践」と、前著ではわずか1節しか充てられていなかった「世界観」の問題に、丸ごと一章割かれている点である。前著でもこの問題が軽視されていたわけでは決してなく、特に1943年初頭のスターリングラード戦敗北以降国防軍のイデオロギー的ナチ化が進行し、国防軍と武装SSの違いが不明確になる中で、「ナチスの前衛」としての自らの存立条件を維持し自己主張するために、世界観教育の強化推進が武装SSにとって重要な意味を持つようになったことが指摘されていた（『武装SS』198, 254, 256頁）。しかし本書では、組織としての自己主張という機能的な面からだけでなく、世界観教育の内容や「実践」のあり方といったさらに深いレベルにまで掘り下げて分析されている。

確かにナチ党の世界観は多元主義的、多中心的であり、「これがナチ党员・組織固有の絶対的な世界観であったというものは存在しなかったと見る見方が現在では一般的になってきている」（本書57頁）。しかしナチズムにとって世界観の敵、人種の敵のナンバー・ワンがユダヤ人であったことも事実であり、反ユダヤ主義がナチズムの世界観において決定的な役割を果たしたことは否定できない。反ユダヤ主義ボイコットや「水晶の夜」事件で端的に見られるような「感情の反ユダヤ主義」は従来、SSの「理性的反ユダヤ主義」と対比・区別して論じられることが多く、粗暴な前者は多くのドイツ人の支持するところではなく、後者においては構造的・経済的要因が重要であったとして、全体として反ユダヤ主義がもつ意味合いが軽視されることが多かった。しかし法的・社会的なユダヤ人排除を下支えしていく基盤として「感情の反ユダヤ主義」は不可欠な「酵素」だったのであり、両者は「むしろ相補的であった点を見直す必要があるのではないか」（60頁）と、著者は重要な指摘をしている。

世界観教育などを通じ、こうしたイデオロギーを武装SSの兵士の多くが内面化していたことは勿論重要であるが、更に重要なのは著者によれば、彼らがこうした世界観を「実践」し、自らの経験を通じてその「正しさ」を再確認する「機会」に事欠かなかつたという点であった。強制収容所におけるユダヤ人監視や、「水晶の夜」事件での暴力行動、ゲットー住民に対する抑圧政策など。特に対ポーランド戦では、世界観教育の担当者が校生を引き連れたまま行動隊を指揮し、大量虐殺を行った。これこそ「理論と実践の文字通りの結合であり、生徒も教師も学び教えたことをまさに実行する」（84頁）ということであった。

教育と実践を通じて重要な意味を持つに至った世界観の問題に対し、前著と比べてやや曖昧な位置づけになったのが、著者がイデオロギー・世界観とは別個に「メ

ンタリティー」という概念で説明してきた諸要素である。具体的には、「誠実」「服従」「戦友愛」「闘争のための闘争者の根本態度、苛烈さ、あらゆる人間的感情に動かされない厳しさ、<劣等人種>への侮蔑、SSに属さない他のすべての人間に対する尊大さ」といった「特有のメンタリティー」(『武装SS』196-7頁)を指す。本書でも第1章第2節で「忠誠」「服従」という苛烈で厳格な垂直関係と、それを補償・中和するものとしての水平的な「戦友愛」が、第3節では人間の生存の基礎としての「永遠の闘争」という観念と、自らの属する人種が他の人種に対して文化的に優越しているという信念が論じられている。こうした「メンタリティー」は、反ユダヤ主義世界観という第2章の主題では括れない問題であることから世界観・イデオロギーとは別個に論じられているのかもしれないが、両者の相互連関が今ひとつ見えにくい。著者自身、忠誠については「特殊ドイツ的忠誠イデオロギー」という言葉、第3節についても「世界観あるいは行動原則」という表現を使っており、いずれにしてもここで論じられている問題が世界観やイデオロギーの問題と密接にリンクしていることは間違いない。評者自身も取り組むべきアポリアではあるが、イデオロギー、世界観とはそもそも何を指すのか、「理論的教義性/メンタリティー」といった区分けはどこまで有効なのか、ドイツ語で言うところの Sekundärtugenden (副次的美德)と世界観の問題は切り離して論じることができるのか、興味の尽きないところではある。

他方視線をイデオロギーの問題から、「加害者」の問題や「現場」のダイナミクスへと転じると、前著の第4章「武装SS将校と兵士」に匹敵するような独立した章は本書には見あたらない。本書はそもそもヒムラーを頂点とする武装親衛隊の組織史・構造的叙述なのであって、ミクロの視点を求めること自体筋違いなのかもしれない。しかし、本書の随所に見られる著者の「細部」に対する強いこだわりには、そうした読み方をしている読者をも納得させるものがある。具体的には、アイケ、フェーゲラインなど指導的な立場にあった人々から、世界観教育担当者、虐殺で中心的な役割を果たしたSS少佐、ホロコーストで重要な役割を担った武装SS医師などの「機能エリート」たち、「水晶の夜」で暴力行為を働いたSS中尉や特務部隊員まで、多様な「加害者」たちの経歴が挿入されていることである。またホロコーストやSS医師による人体実験を論じる際に、グロテスクな殺害の「細部」が時折言及される。例えば、「一人に二人の兵士が付き一名は後頭部を一名は心臓を狙って撃ち抜き、子どももいる場合母親の肩に乗せ母親ともども三人の兵士が撃つ形をとって射殺は繰り返された」(109頁)といった具合である。

「加害者」たちの経歴は一樣ではなく安易な一般化は困難であるし、ミクロな叙述が論理構成全体にどのような意味を与えているのか、本書からは必ずしも明確ではない。しかしながら多くの「加害者」たちの経歴からは、上からの命令を「歯

車」のように冷徹に実行する「理性的」加害者像とはほど遠い、かなりの程度自由意志でSSや武装SSに入隊し、昇進を遂げ、イデオロギーを内面化し、暴力に積極的に加担する「自発的加害者」像が浮かび上がってくる。また殺害の「現場」からは、「加害者」にも大きな精神的負荷をかけかねないようなプリミティブな殺害の実相が垣間見える。絶滅収容所の「工業的殺人」「死の工場」イメージとはおよそかけ離れたこうした殺害がなぜ可能だったのかを考えるなら、やはり世界観やイデオロギーの問題は避けて通れない。上記の②と③の問題群は、密接に絡み合っているのである。

以上、1990年代以降のナチズム・ホロコースト研究の中に本書をどう位置づけるかという観点から、②③という視角を中心に論じてきたが、違う読み方もむろん可能である。軍事機能と警察機能の融合した「ポリタリー」概念、ホロコーストにおける武装SSの多機能性、「20世紀世界の戦争と暴力という脈絡にこの暴力組織を据えて分析する」(2頁)という大きな問題意識から、ホロコーストの開始時期は(1941年)8月中旬か12月か、1941年7月31日のゲーリングからハイドリヒへの権限譲渡をどう位置づけるか、といった個別の論点まで、著者が投げかけている問題は少なくない。ツィクロンBが間違いなくガス殺に使用されたことを裏付けている点も、ホロコースト否定論の文脈では重要である。

しかしそうした個別の論点以上に評者が感銘を受けるのが、著者の研究姿勢である。前著に対しては、体制内部での対立・競合関係を強調するポリクラシー論に傾斜するあまり、国防軍と武装SSの協力・分業関係が見えにくくなっていたこと、独ソ戦については詳述されている一方でホロコーストへの武装SSの関与についてはあまり述べられていなかったことなどが指摘されていたが、本書はそうした「積み残し」の課題に正面から取り組むものである。また著者は基本的には「機能派」の立場に立っているものの、機能派の論点では必ずしも掬いきれない世界観や「加害者」の主体性の問題を、避けたり軽視したりすることなく意欲的に摂取している。膨大な一次文献が存在し、到底把握しきれないような大量の研究書・論文が刊行され、現代社会の変容にあわせて歴史家の問題意識も研究動向もめまぐるしく変化するナチズム・ホロコースト研究(現代史研究)にあって、若手研究者が本書から最も学ぶべきなのは、そうした著者の粘り強さ、柔軟性、知的な誠実さといった研究姿勢そのものであるようにも思われる。